



「中東」概念の変容—中国・インドの台頭と「西アジア」の復活？

東京大学 先端科学技術研究センター 准教授 池内 恵

一つの問いかけ

「中東」とは世界地図のどこからどこまでを指すのだろうか？これはきわめて初歩的な質問に感じられるかもしれない。中東に何らかの形で関わりを持つ人々を読者と想定する『中東協力センターニュース』であえて解説するようなことではないと感じられるかもしれない。しかし中東に一定期間関わってきた人々の間にこそ、今この問いを問い直すことの意義を分かってもらえるのではないかと思う。「中東」とは実はそれほど明確な、確固とした概念ではない。「中東」がどこからどこを含むのかは、その時々国際政治によって決められてきたという側面がある。

筆者は最近、講演などで、Encyclopedia Britannicaが作成してウェブサイト公開しているこのような中東の地図を示してみることがある。



出典：Cydney Grannan, “Are the Middle East and the Near East the Same Thing?” <https://www.britannica.com/story/are-the-middle-east-and-the-near-east-the-same-thing>

筆者が会場に問いかけてみる問いかけは、「中東がこの地図のようになったのはいつでしょう？」というものだ。この地図には著作権を記載する箇所に「2012年」と記されているが、それはこの地図を描いて公開した年であって、この年に中東の範囲がこの地図のようになったということではない。視力検査ではないのだから、Encyclopedia Britannicaがそのような地図を作るに至った現実が成立した時期を考えて答えてもらうのが質問の趣旨である。

地図の個々の部分に注目すれば、答えはいくつもあるように見えるかもしれない。トルコの国境がほぼ現在のようになった時と言え、1923年のローザンヌ条約の年を答えるのもいいかもしれない（正確にはシリアやイラクとの国境線の詳細の確定にもう少し時間がかかったが）。東の端にアフガニスタンを含んでいることから、2001年の9・11事件より後の中東認識に基づいているのではないかと推定することもできる。9・11事件によって、アフガニスタンとアラブ世界のジハード主義者との繋がりが強く認識され、ジハード主義者に対する「対テロ戦争」が国際政治の主要課題となることで、アフガニスタンの中東への「帰属」が、より強く認識されるようになった。それ以前は、アフガニスタンは必ずしも中東の一部として扱われてはいなかった。むしろパキスタンとインドと同じ南アジアの一部、あるいはタジキスタンなどにつながる中央アジアの一部として認識されることが多かった。アフガニスタンのターリバーン政権が、アラブ人が主導するアル=カーイダを支援し、そのアル=カーイダが対米テロを行い、米国の外交安全保障政策がアフガニスタンとアラブ世界との繋がりを主軸とするジハード主義者の掃討を主要課題として掲げるようになって各国がそれに追随したことで、アフガニスタンは「中東になった」とも言える。

この地図がいつの時点の中東に基づいて描かれたかを特定するための決定的な要素は、南端の、スーダンと南スーダンが分けて描かれているところである。南スーダンは2011年にスーダンから独立している。重要なのは、独立した南スーダンは、この地図で中東に含まれていないところである。南スーダンがスーダンの一部だった時代には、南スーダンも中東の一部として描かれることが通常であった。南スーダンは国家独立を果たした政治文化的根拠や、その背後の国際政治の力学から、中東の一部ではないと広範にみなされている。そのことをこの地図は反映して描かれている。「中東」とは、物理的な地理的な境界に

筆者紹介

1996年、東京大学文学部イスラム学科卒。アジア経済研究所研究員、国際日本文化研究センター准教授を経て、2008年10月より現職。ウッドロー・ウィルソン国際学術センター客員研究員、ケンブリッジ大学客員フェロー、アレクサンドリア大学客員教授などを兼任した。中東地域研究、イスラーム政治思想を専門とする。主要著作に『現代アラブの社会思想—終末論とイスラーム主義』（講談社、大佛次郎論壇賞）、『アラブ政治の今を読む』（中央公論新社）、『書物の運命』（文藝春秋、毎日書評賞）、『イスラーム世界の論じ方』（中央公論新社、サントリー学芸賞）、『中東危機の震源を読む』（新潮社）、『イスラーム国の衝撃』（文藝春秋、毎日出版文化賞・特別賞）。最新の著作は『増補新版 イスラーム世界の論じ方』（中央公論新社）、『サイクス=ピコ協定 百年の呪縛』（新潮選書）、『シーア派とスンニ派』（新潮選書）。

個人ブログ「中東・イスラーム学の風姿花伝」(<http://ikeuchisatoshi.com/>)でも情報発信中。

よって画定されているものではなく、国際政治の情勢の変化と、それに基づく認識の変化によって伸び縮みする存在である。そのことを南スーダンの独立と中東からの離脱は、如実に示している。「中東を見る」ということは、日々に伸び縮みする中東の、背後にある国際政治の論理や現地の政治文化のバランスの変化を見て行くことでもある。

そして、中東をめぐる国際政治は、現在大きく変化しつつある。そうであれば、「中東」という概念とその指し示す範囲そのものが、さらに変化を迫られていっても、おかしくない。それどころか、中東という地域を「中東」と呼ぶこと自体が、国際社会の政治経済的なパワーバランスに大きな変化があれば、廃れてしまうかもしれない。その場合、「中東」に変わってどのような概念が用いられるのだろうか、そこまで頭の片隅に置きながら中東情勢を注視していく必要がある。

「中東」という概念を再検討し、その最新の範囲を確定し、同一の地理的範囲を包摂する競合する概念・選択肢を検討することは、中東の現状分析として定期的に行っておく価値のある作業である。それは中東をめぐる国際政治の諸勢力のパワーバランスの現状と将来の方向性を見定める作業であるからだ。パワーバランスには軍事力や経済力といった「ハード」あるいは物質的なパワーがもちろん関わって来るが、それだけでなく、価値や規範、文化的な影響力も含まれる。中東という地域の政治・経済・安全保障、そして認識のあり方や価値規範を、「誰が」主導してどのように定めていくのか、その担い手の変化とその結果としての支配的な認識の変化は、「中東」の概念の有効性や範囲を変え、同じ地域をめぐる競合する概念の有効性を増減する。「中東」という概念は国際政治のどのようなパワーバランスの中で形成され広まったのだろうか。今その概念とそれが指し示す範囲はどのように変化しつつあるのか。そして、中東はいつまで「中東」と呼ばれうるのだろうか。「中東」に変わる概念の候補にはどのようなものがあり、どの程度の有効性を持っているのだろうか。検討していこう。

「中東」という概念の起源

「中東」という概念はそもそもいつ、どのように形成されたのだろうか。中東地域はいうまでもなく、古代文明や世界宗教の発祥の地であり、エジプト、アナトリア、シリア、パレスチナ、メソポタミアといった、文書記録や非文書史料によって、長期的に人類社会の存在が知られる地理範囲を、いくつも含んでいる。しかし「中東 (Middle East)」という概念は、実はかなり近年に作られたものである。「エジプト」や「メソポタミア」や「アナトリア」などは、その厳密な範囲は時代によって若干異なるものの、ナイル川の河谷やチグリス川・ユーフラテス川の沖積平野（「メソポタミア」とはギリシア語の「複数の川の間に由来する）あるいは地中海・エーゲ海・黒海に囲まれた半島といった、物理的に明確な地理的要因によって規定されている。これは「アフリカ」や「アメリカ」とも同様で

ある。しかし「中東」はそうではない。特定の主体の視点から見た「東」として規定される相対的な概念であり、その指し示す範囲は、その時々国際政治の変化と、それに伴う文化的な認識の変化により、自在に伸縮してきた。

「中東」という言葉を最初に使用したのは米国の海軍軍人で海洋戦略論を唱えたアルフレッド・セイヤー・マハン（1840–1914年）とされる⁽¹⁾。しかしマハンのいう「中東」の範囲は曖昧であり、ロデリック・デイヴィソンによれば、「スエズからシンガポールに至る海のルートを覆う不確定な一部分」といったものに過ぎなかった⁽²⁾。

「中東」という概念をより厳密に定義し運用し、広めていったのは、大英帝国の政治行政官である。大英帝国にとって最も重要な植民地であったインドが「東」であることを前提にして、そのインドに至る道を「帝国のコミュニケーション (Imperial Communication)」の要路として重視した。インドに至る道沿いにある、現在のトルコやエジプトやシリアやイラクを指す概念が必要になる。それによって「中東」という概念が形成されていった。

当初から「中東」という概念が今と同じであったわけではない。当初は「中東」は「近東 (Near East)」と共に用いられており、その際の「中東」の範囲は今とは大きく異なっていた。

「近東」は、19世紀の後半から第一次世界大戦の時期まで、現在の中東とかなり重なる地域を指していた概念である。「近東」は、西欧国際政治の「東方問題 (Eastern Question)」の文脈において形成された。西欧国際政治においてオスマン帝国が「病人 (Sick Man)」として形容され、「東方問題」の焦点となる中で、インドよりも西欧に近い「近東」としてオスマン帝国の領域が可視化された。並行して、オスマン帝国と同様に列強の進出の争奪戦の対象となった中国、そして韓国と日本も、「極東 (Far East)」と呼ばれた。

この場合の「近東」は、現在の「中東」のうちトルコやアラブ世界を指すが、それだけではなく、オスマン帝国が19世紀を通じて失っていったバルカン半島も含んでいた。また、「近東」と並行して「中東」の語が用いられる場合は、その場合の「中東」は、現在の「中東」からトルコやアラブ世界という「近東」の領域を除いた領域、すなわちイランとコーカサス、アフガニスタン、中央アジアが含まれ、さらに現在は中国領にもかかっているトウルクスタンをも含むことがあった。

現在の範囲を指して「中東」概念が用いられ、定着していったのは、第一次世界大戦から第二次世界大戦にかけての、オスマン帝国が決定的に崩壊し、その地域の秩序形成が国際政治の焦点となる過程においてだった。「中東」がどこからどこまでを指す、どのような

(1) A. T. Mahan, "The Persian Gulf and International Relations," *The National Review*, September 1902, pp. 38–39.

(2) Roderic H. Davison, "Where Is the Middle East?" *Foreign Affairs* 38, July 1960, pp. 667–668.

実態であるか自体が、この国際政治の対象であり課題であった。「中東」とは当初から政治性を帯び、曖昧さを含まざるを得ない概念であった。

大英帝国の覇権を受けついで米国は、政治性と曖昧さと含めて「中東」概念を継承した。1957年のアイゼンハワー・ドクトリンは公式文書でこの概念を採用した最初のものでされる。1958年の国務省の説明によれば、この「中東」は「近東」と交換可能な用語とされる。つまり、この時点で「中東」と「近東」は同じ範囲を指す概念となっていたことになる。そこにはエジプト・シリアやイスラエル・レバノン・ヨルダン、そしてイラク及びアラビア半島の諸国を含むものとされた⁽³⁾。

「中東」という概念は、西欧の帝国主義・植民地主義のアジア・アフリカへの拡大の中で、特に英国にとって「インドへの道」の途上に位置する戦略的に重要な地域を指すものとして形成された。この地域の管理・影響力の行使をめぐる争奪戦が繰り広げられる中で、域外大国や現地の地域大国、現地の民族主義諸勢力などのパワーバランスの変化に応じて、「中東」は範囲を変えていった。近い過去においては、米国の覇権の下で、それらのパワーバランスが一定のものに落ち着いたことで、「中東」の概念が一定のものとなっていたと言える。あるいはそのような概念を決定することのできる主体が、その時々を超大国なのだとも言える。国際政治における覇権の所在が揺らげば、あるいは秩序を構成しているパワーバランスや支配的な規範が揺らげば、特に「中東」のような概念は揺らぎかねない。

「中東」概念への批判と競合概念

「中東」という概念の恣意性や、それが西欧の植民地主義や米国の世界戦略の中で用いられてきた政治的な概念であることは、この概念が普及する過程で早くから批判の対象にもなってきた。これは反植民地主義と欧米中心主義の文脈からの批判といえよう。「サイクス＝ピコ協定」を発端とする英仏による恣意的な中東の切り分けと、歪な中東諸国形成についての批判は多いが、ここにはそもそもサイクス＝ピコ協定に代表される英仏の植民地主義によって出来上がった「中東」概念そのものへの批判を含んでいた。現在も、例えばイランの要人や学者には「中東」という言葉の使用を、意図的に避けようとする傾向もあるように見られる。敵対する米国の覇権と秩序を、その概念からも認めない、という政治的な姿勢の表明だろう。

「中東」という概念には、競合する概念が多くある。それらには、「中東」という概念に必ずしも反しない、「中東」概念を支える、両立可能あるいは下位概念と理解できるものもある。例えば「アラブ世界」という概念は、しばしば一般には「中東」と混同されて用いられることもあり、「中東」との同一性と差異が非専門家にとって容易に判別できないこと

(3) “Near East' Is Mideast, Washington Explains,” *The New York Times*, August 14, 1958.

があるが、しかし「中東」に反する概念ではない。「中東」も「アラブ世界」も、いずれも近代の欧米の影響・支配の下で、主権国家や民族・国民概念が導入される過程で形成された地理概念である。「アラブ世界」は中東の大きな部分を占める、アラビア語を母語とする人々を主体とする諸国を指すものとしての使用が可能な概念である。ただし細部を見ると、例えばソマリアやジブチやコモロといった、アラブ連盟には加盟しているが、通常は「中東」の地図に含まれない、といった諸国もある点には留意が必要だが。

「中東」の定着によって、いわば置き換えられ、使用頻度が減っていった概念もある。例えば「レバント」という概念がある。「レバント」は東地中海地域の、シリアやレバノンやパレスチナを中心にギリシアやエジプト北部を含む、概ねオスマン帝国が支配していた領域を指すが、ここに複数の異なる民族が近代の主権国家を作ることによって、この地域の一体性や人的交流の波が寸断され、現在の地域概念として用いることの利点が薄れたことが、この概念の放擲・忘却の原因だろう。

「中東」とこれまた非専門家からは混同されやすい概念としては「イスラーム世界」もある。「イスラーム世界」は「中東」よりもさらに曖昧模糊としている面もあり、確固とした根拠がより多くあるとも言える。「イスラーム世界」はイスラーム教の信仰者の分布を、さらに言えばイスラーム教の宗教や文化が歴史的にあるいは現在に影響を及ぼしている範囲を指すことにもなりかねず、近代の主権国家の領域に必ずしも限定されないため、明確に範囲を区切ることも容易ではない。しかしイスラーム教の共同体への帰属意識を持った人々が現地に多くおり、帰属意識の観念が内在的で根深いことを考えれば、外在的な政治的要因によって左右される「中東」よりも真正なものとする立場も可能だろう。

中世あるいは古代の歴史書を見れば、「中東」は原則として存在しない。中世や古代史を記述するために「中東」の語を用いることは場合によっては有用であるにしても、あくまでも近現代の概念を過去に投影する、時代錯誤を含んだ「アナクロニズム」であることを意識しておかなければならない。より中立的な歴史記述の際に用いられるのが「西アジア」である。これは「シルクロード」によって繋がれた、中国から中央アジアあるいは南アジアの海域を通り、ヨーロッパに至る領域の「西側」を指すという、大まかだが根拠のある地理区分である。日本の世界史教科書における記述も、前近代までは中国やインドから見た「西アジア」としてイランからイラクやシリアなどを記述し、近代の欧米の影響が及ぶと突然に「中東」が登場するという形式を取る。

「中東」の伸縮、そして置き換え？

中東をめぐる国際政治の近年の大きな変化は、「中東」概念にも変化を迫っている。「中東」の地図は今後どのように変わっていく可能性があるのだろうか。いくつかの顕在化している方向性を列挙しておこう。

第一に、近代の「中東」概念の形成そのものに深く関与していた「欧米」の中東における覇権や支配の構図が、部分的にも、揺らぎ始めていることに注視すべきだろう。オバマ政権からトランプ政権にかけて米国が中東への持続的で深い関与の維持に躊躇を見せている中、イランやトルコ、サウジアラビアや UAE といった中東の地域大国・有力国が主導した秩序形成が部分的にも行われつつある。それを反映した「中東」概念の修正は早晚生じてもおかしくない。例えば UAE やサウジアラビアやトルコが紅海の西岸地域に進出し、ジブチやソマリアやエリトリアなどとの結びつきを深めることにより、将来には中東の地図はこれらの「アフリカの角」地域を含んで描かれることになるかもしれない。

第二に、イスラーム教の政治的な紐帯の再認識や、法的な普遍性と現実性への信頼の強化により、「イスラーム世界」が、歴史的・文化的な概念にとどまらず、国際政治上の概念としての現実性を高めている。顕著な例は2014年から17年にかけてイラクとシリアで領域支配を行った「イスラーム国」である。「イスラーム国」は近代の国際法秩序に挑戦し、中東地図のまったく新たな塗り替えを唱道して、中東内外の勢力からの反発を受け、当面はその領域支配の範囲を失った。しかし「イスラーム国」が依拠した理念は消滅しておらず、「イスラーム国」に賛同・参加した勢力に独自のものではない。近代の欧米主導の「中東」の形成とその秩序・規範を否定し、それに代替するものとして「イスラーム世界」の実体性を主張し、現実化を図る勢力は今後も出現してくる可能性がある。「イスラーム世界」という概念は今のところは、「中東」が生み出したイスラーム教の影響を重視した、「中東」とほぼ交換可能な、少なくとも「中東」という概念とそれほど対立しないものとして通用しているが、国際政治の展開次第では、「中東」という概念を置き換えることを意図した主体によって、強い現状批判を含んだものとして用いられていくだろう。

しかし「イスラーム世界」は、現状の国際政治の秩序に挑戦の意図を持つ勢力にとって、必ずしも使い勝手のいいものとは限らない。イスラーム教を主要な宗教としない地域や国にとっては、イスラーム教の優位性・普遍性、特にイスラーム法の適用の可能性・必要性を内包した「イスラーム世界」という地理概念は、主体的には受け入れにくいからである。そこから代替案として復活の兆しが見られるのは「西アジア」の概念である。これは中国の台頭と、中国からヨーロッパまでの中東を含む地域を経済圏とする「一带一路」構想の鼓吹と結びついているものとみられる。世界経済の中で中国の中心性が高まるにつれて、近代の欧米の政治経済的覇権を前提とした「中東」という概念を置き換え、中国から見た「西アジア」という、中世以前の歴史記述においては概ね妥当する概念を、現代の国政政治経済にも持ち込むことが、それほど不自然ではなくなっている。「西アジア」の実体性が高まり、歴史記述だけでなく現代の国際社会についても広範に用いられるようになった時、歴史は大きく転換したと言えるだろう。

日本では外交の主要な柱として「インド太平洋」戦略の策定と展開が掲げられるように

なっている。これは米国の世界戦略と部分的に呼応しつつ、中国の「一帯一路」戦略への暗黙のうちの対抗と見られている。ペルシア湾岸や東アジアからインド亜大陸の沿岸や東南アジア島嶼部を経て中国・そして日本にまで至るルート、すなわち環インド洋地域から環太平洋地域にかけての通商航海路の重要性は、前近代を扱う歴史学においては重要なテーマである。これが現代の国際政治の課題としても定着するかどうかは今後の展開を見なければならないが、大きな目で見れば、一方では中東における欧米の地位の低下と、世界経済そしてグローバルな国際政治の中での東アジアや南アジアの台頭と、中心の移動というトレンドの中において一定の現実味がある。「中東」概念は「西アジア」や「インド太平洋」に徐々に置き換えられていくのだろうか。欧米中心主義を拭い難く抱え込んだ「中東」概念だが、近代の欧米が中東の政治経済・社会文化に残した影響はあまりに大きく、一朝一夕に「中東」概念が一掃されるとは考えにくい。しかし東アジアや南アジアを中心にした世界の新たな経済的な秩序の中で、中東が「東」ではなく「西」として扱われる時代は、そう遠くない時期に来そうである。何よりも、中東諸国の人々が、「西」の欧米ではなく、「東」の中国やインドを向き、経済的機会や政治的同盟者を模索している。それによって、欧米の「東」としての中東のアイデンティティは、意外に短い期間で変化するかもしれない。それによって、「中東」と競合する概念がより実効性のある形で用いられていくだろう。

*本稿の内容は執筆者の個人的見解であり、中東協力センターとしての見解でないことをお断りします。